

Title	現代台湾におけるケア労働者のイスラーム：ケア労働者研究におけるメディア論的視座の可能性
Sub Title	Islam for care workers in modern Taiwan : possibility of media studies in care workers' research
Author	高橋, 萌(Takahashi, Moe)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	2021
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要：社会学心理学教育学：人間と社会の探究 (Studies in sociology, psychology and education : inquiries into humans and societies). No.91 (2021.) ,p.(35)- 48
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000091-0035

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

現代台湾におけるケア労働者のイスラーム

ケア労働者研究におけるメディア論的視座の可能性

Islam for Care Workers in Modern Taiwan: Possibility of Media Studies in Care Workers' Research

高 橋 萌*

Moe Takahashi

序 跋

本論文は、2021年1月25日急逝した高橋萌君の遺稿である。執筆時は、慶應義塾大学大学院社会学研究科後期博士課程3年であった。本稿は、もともとは、博士論文の草稿として執筆していたと思われる。たまたま友人の山内萌君（同研究科修士課程修了、現在慶應義塾大学大学院政策・メディア研究科後期博士課程2年在籍）と私的な勉強会をしていた時に、高橋君が山内君に渡した原稿である。当時、新型コロナウイルスの蔓延によって、高橋君は台湾でのフィールドワークを中断し、日本に戻っていた。3年時においては、博士論文執筆計画書を提出する必要があったため、中途段階でありつつも、台湾でのフィールドワークの成果を文章化していたと思われる。しかし、その後、国外への渡航は一向に可能になる状況にはならず、高橋君はフィールドワークの対象を日本在住のムスリム移民に変更し、SNSなどを用いたインタビューを開始した。そのため、台湾研究も一時中断となり、この草稿も完成させるところまではいっていない。大変残念なことに、高橋君はこのまま帰らぬ人となった。

そこで、本稿について、社会学研究科委員の2名の教授に査読をしていただいたところ、理論的な先行研究の検討や得られた限りでのデータの提示や分析は、査読意見に基づいて本人が修正する機会は持ちえないとしても、十分論文として世に出す価値があると判断された。また、本研究科の紀要編集委員会においても検討を行った結果、掲載可の判定を得ることができた。

その結果、誤字脱字の訂正や、不足していた文献情報の増補など、第三者が行いうる加筆修正を経たうえで、本稿を掲載することとなった。英文要旨はもともと作成されていなかったことから、本紀要にも掲載できていない。また、筆者による注ももともとついていない。今回付した注は、本文を読み進めていくうえで内容に関わって必要最小限の修正や注記が必要と推察される部分であることをお断りしておく。加筆修正は、指導教員の三尾裕子が主に担当したが、社会学研究科の北中淳子先生、金柄徹先生や、研究領域の近接性という観点から、インドネシアなどから台湾に結婚移民として移住してくる女性たちの文化人類学的研究において著名な研究者である滋賀県立大学の横田祥子准教授にご助力いただきたい

* 慶應義塾大学大学院社会学専攻・後期博士課程

た。この場をお借りして心から御礼申し上げます。

本研究は、文化人類学的な視点から行われた女性を主とする国際労働移民研究として、またそうした移民たちの移動先での宗教実践に関して、今後参照される価値のある研究であることは間違いない。従来の研究は、移動する女性を国際的な経済格差の中で抑圧された存在として、それゆえ、教会などを通じて行う社会運動などを通してエンパワーされるべき存在として描き出してきた。あるいは、介護を行う家庭において自由な外出を制限されることで、自らの宗教実践が妨げられる虐げられた存在として、描き出される傾向があった。しかし、高橋君の論文は、SNSなどのデジタルデバイスを用いて柔軟に移動先の環境と自らの文化的実践との折り合いをつけている女性たちの姿を描き出しているという点で、新奇的で革新的な研究の萌芽が見て取れる。彼女の研究者としての営為が少しでも今後の学界において記憶され、学問の進展に寄与するものになることを期待したい。(三尾裕子 2021年3月29日記)

1. はじめに

本稿は台湾人家庭に住み込みで働くインドネシア人ムスリムのケア労働者を事例に異文化の境界領域における宗教実践がどのように編成されるのかを考察する。

近年、東アジアでは女性の社会進出と高齢化を背景に、家事や介護、育児など従来から家内空間で行われてきた再生産領域のサービス化が試みられてきたが、家庭における家族介護が主流となっており、「ケアの脱家族化なき再家族化 [安里 2014]」が進んでいると言われて久しい。しかし、女性の社会進出や少子化・晩婚化という社会変化を同時に引き受ける中で家族のみでの介護が難しい課題となり、ケア労働者の受け入れなど、海外からの移民労働力にますます頼るようになっていく。ケア労働者とは、家事・育児・介護などのいわゆる再生産労働に従事する者をさす。このように、再生産領域において海外からの移民労働力に頼る「再生産過程の越境化 [佐藤 2012]」は、移民労働者が異文化の境界領域で就労する機会を拡大させ、彼らが異文化への適応を試みる過程で自らの文化や宗教を問い直す混淆的な文化状況を生み出す。

本稿が対象とする台湾では、1990年代以降から外国人の家事労働者・介護労働者の受け入れを開始した。主にインドネシア、フィリピン、タイ、ベトナムからケア労働者を受け入れている。台湾の文脈では、社会経済的に弱い立場におかれるケア労働者の女性と逼迫した家庭状況に生きる雇用主女性との間での権力関係が問題化されてきた。上流階級だけではなく、中産階級の家庭においても、フルタイムでの就労を希望する女性が保育のためにケア労働者を雇うようになり、「三代同堂」という伝統的な家族のあり方が変容した。その中で、女性が従来通りに子育てや家族介護を担えないことに対する社会的プレッシャーを感じ、自らの代理人である「ケア労働者」が自分の思うように働かない姿に歯痒さを感じ、ケア労働者を支配する行動に向かうという分析がある [藍 2008: 133-170]。

しかし、現在では保育園の設置数が大幅に上昇し、保育部門のサービス化が進み、現在、ケア需要のパターンは保育から高齢者介護へと変化している。それと同時に、雇用主から好まれるケア労働者の国籍は英語能力を備え「頭が良い」とされる教育上有利なフィリピン人から、「従順かつ長時間労働に耐えうる」インドネシア人へと変化している。インドネシア人労働者の増加は、信仰実践を重視するムスリムの増加を意味する。これまで、先行研究ではムスリムのケア労働者の女性の信仰実践は雇用主の無理解によって遂行不可能になることが指摘されてきた [劉 2012]。実際にケア労働者たちは休みなく働く状況下、出身国におけるそれとは異なる方法で実践を遂行しようとするのが想定できる。しかし、

先行研究では実践が遂行不可能になることは指摘されているが、住み込みでの就労という自由な遂行が不可能な状況下で、ムスリムのケア労働者がどのようにイスラームと向き合い、実践を維持しうるのかはあまり議論されてこなかった。

そこで、本研究では、ケア労働者に関する先行研究において宗教がどのように議論され、イスラームがいかなるものとして捉えられてきたのかを踏まえた上で、台湾で就労するケア労働者女性や台湾人雇用主へのインタビューからケア労働者によるイスラームがいかに持続/維持されているのかを明らかにする。

1.1. ケア労働者研究における「宗教」

本稿が主な対象とするケア労働者に関する研究は、福祉レジーム論、ジェンダー論、社会学、人類学など多岐にわたる学問領域で行われてきた。先行研究の特徴は、ケア労働を世界的な経済格差を背景に構築された発展途上国から先進国への人の移動が生み出す近代の権力装置として捉え、それを反省的に議論する点にあると言える。そのため、多様な方法論や観点による分析を通して、「国家とケア労働者」あるいは「国家と国家」「ケア労働者と雇用主」とのポリティクスの諸相を強調し、その構造を多角的に明らかにする研究意図を内包してきた。同時に、ケア労働者の権利向上を目的とする社会運動の構造や関連する政策分析に力点が置かれてきた。

権力論に依拠する先行研究では、ケア労働をジェンダーや人種などの差異が複雑に交差したプロセスとして描きだし、送り出し国、受け入れ国の政府、仲介業者などの諸アクターが関与する政治力学を概念化してきた [Loveband 2004; Anggraeni 2006; Constable 2007; 藍 2008; 上野 2009; Liang 2011; Parreñas 2015]。ケア労働者の受け入れ国の文脈に即して先行研究の傾向が分かれるが、ケア労働者と宗教に関する研究はどちらかといえば、等閑視されてきたと言える。例えば、コンスタブルは、ケア労働者研究の動向を端的に二つの潮流に分けて説明している。一つ目の潮流はケア労働者による移民政策に対する抗議行動や抵抗の諸相に着目した研究 [Constable 2007; Hsia 2009] であり、二つ目が宗教人類学の観点からなされたサウジアラビアなど中東地域で働くケア労働者の「ムスリム改宗」の研究 [Hawwa 2000; 細田・渡邊 2013; Akinci 2019¹⁾] が中心であるという [Constable 2010: 312]。これらの研究は、人類学的視点を援用し、異文化の中で生活全般に関わる家事やそれに関連する仕事を担うケア労働者たちが様々な困難に見舞われることを指摘してきたが、これはケア労働者の社会的包摂と排除を中心的な議論とする社会学の方法論に基づいているからである。

これに対し、社会運動に着目しエンパワーメントの諸相を明らかにする社会学的視点と人類学的な観点を統合した研究がある [Johnson and Werbner 2010, 2011]。ジョンソンとワーブナーは、ケア労働者の宗教的経験が、抗議行動などの政治に向かわせる原動力を喚起し得る想像力を伴うとして、宗教的想像力という観点から、宗教の役割や意味を積極的に検討する。*The Asia Pacific Journal of Anthropology* における特集で、コンスタブルは、香港のフィリピン系独立教会が支援する移民労働者組織に積極的にアクティビストとして関わるフィリピン人労働者やインドネシア人労働者の語りを事例に、抗議行動の理念と移民労働者の宗教観との両立可能性を指摘する [Constable 2010]。彼女たちは故郷から離れた新たな移住経験のなかで、自己の信仰に疑念を抱き、時に問い直し、それまでの信念を簡単には受け入れられなくなる状況を経験する。自己の宗教に対する葛藤はムスリムへの改宗あるいは新たな別の宗派への傾倒という多様な方法で対処される。それでも、彼女たちは宗教から完全に関わりを持たなくなる

のではなく、香港にあるフィリピン系独立教会で抗議行動の理念と教義を両立させるための説明方法を模索していく。例えば、インドネシア人のムスリム女性はインドネシアにおいてイスラームが政治活動においても重要な位置にあることを前提に、ムスリムのアクティビズムへの関与を阻害しない根拠を、イスラーム法解釈を参照しながら探求していったことが示されている [Constable 2010: 323-324]。コンスタブルのこのような主張は、宗教は女性抑圧の道具であり、女性を消極的な身体たらしめ束縛するという主張を暗黙の前提とするジェンダー研究に対する反理論を提出する意図があったと言える。

1.2. 東アジアを対象としたケア労働者研究における「イスラーム」

宗教に関連する先行研究ではインドネシア人労働者よりもフィリピン人労働者を事例とした分析が中心であり [Cruz.T 2006; Cruz-Chia 2007; Yap 2015]、宗教が労働者の抵抗や抗議行動を時に正当化し得る装置として機能し得る点、すなわち、労働者によるポリティクスの側面が強調されてきた。抗議行動を支援する組織がフィリピン系の独立教会と接続している状況も関係して、キリスト教的な啓蒙主義思想に基づいた宗教観が運動の正当化に関与したプロセスを強調してきたとも言える。他方、以下に示すように、生まれながらムスリムである女性たちが、主流社会の無理解によって、雇用主との関係の中で抑圧される側面が強調される傾向にあった [Constable 2007; 上野 2011; 劉 2012; Ho 2015]。

香港やシンガポール、台湾の社会では、食事に関連する事柄で問題を抱えやすいのはインドネシア人のムスリムのケア労働者である。例えば、香港の広東人家庭では豚肉を使用した料理が好まれるため、豚肉を食べよう強制されることはなくとも、豚肉の購入や調理を度々求められる。ケア労働者は豚肉を使った調理をしても、豚肉を食すかどうかは個人の判断で決定する場合が多い。あるいは雇用主の家族とは別に自分が食べる料理を個別に作る対応が見受けられる [Constable 2007: 106]。また、シンガポールで働くケア労働者を対象とした研究 [上野 2011] で指摘されているように、中国系雇用主の食習慣に適應するために、自らを異国で働く「インターナショナルなムスリム」とであると再定義して豚肉を食すようになる場合もある [上野 2011: 163]。

ホーはこれまでのケア労働者研究においてイスラームを主題とした研究に限られる点を指摘した上で、香港のイスラーム系労働組合へのインタビューを元に、香港のインドネシア人ムスリム女性のケア労働者の脆弱性を論じている [Ho 2015]。香港ではケア労働への需要が高まる中、増加するインドネシア人ケア労働者と香港人家庭との緊張関係が問題となっており、その中でもムスリム女性が直面する問題は等閑視されている。インドネシア人女性は経済的に負担を抱え、住み込みで家事労働に従事する閉鎖的な環境で性暴力被害にあいやすく、家庭内で礼拝が許されない場合もある。香港人ムスリムが集うモスクにはケア労働者は参加せず、ハラールな食材やモスクでの礼拝にアクセスする機会が限られ、十分な支援が受けられないためである²⁾。ホーは、インドネシア人ムスリムのケア労働者の増加によって、ムスリム女性の存在が香港で可視化される一方で、彼女たちが脆弱な存在であり続けている非対称性を指摘する。台湾の場合も同様に、フィリピン人労働者たちがキリスト教教会や隣接する支援サービスを利用し法律への理解を深め、エンパワーされるのに対し、インドネシア人労働者は支援サービスにアクセスする経路が限られより脆弱な立場に置かれていると指摘されている [藍 2008: 109]。

他方、近年のケア労働者研究では、文化人類学的アプローチを援用し、ケア労働者の出身国で行われていた日常実践がいかに変容・継続されるのかを捉え直そうと試みる研究がある [澤井 2017]。澤井は、香港で働くケア労働者たちによるイスラーム文芸活動を詳細に追い、都市部の高学歴女性によって担わ

れることの多いイスラーム活動がなぜ海外のケア労働者によって行われるのかを検討している。また、その活動の一環として発行される小説の文学的な分析を通して、彼女たちが日常を、イスラームを参照軸として解釈し、職業的事情やジェンダー、階層などの複雑な差異が交錯する状況の中で、20代から30代の参加者の女性ケア労働者たちが自己の再定義をめぐって悪戦苦闘する状況を小説の内容から読み解いた [澤井 2017: 99]。

1.3. 先行研究の問題点と本稿の問題の所在

上述の研究動向を総括すれば、これまでの先行研究において、異文化の境界領域において働くケア労働者は、雇用主との非対称な関係に影響されて宗教実践を部分的に制限するという可変性を受け入れ、状況依存的に自在に自己のアイデンティティの拠り所を変容させる存在として描かれる傾向があったと言える。上述の Constable (2010) は、ニーチェによる可塑性 (plasticity) の概念、すなわち、状況に応じて自由自在に形を変えることの出来る物性という概念を用いて、ケア労働者が移住経験を通して自らの宗教を問い直し、運動を正当化しうる文脈を再発見していく過程を概念化した [Constable 2010]。しかし、コンスタブルの関心はケア労働者の宗教実践それ自体というよりも、社会運動家が宗教をいかに再解釈し、運動の理念との折り合いをつけて行くのかを明らかにすることにあった。一方、ムスリムのケア労働者は、雇用主との非対称な権力関係の中で、脆弱な存在であり、少なくとも部分的に遂行不可能になるイスラームのあり方が強調されてきた [劉 2012; Ho 2015]。しかし、ここで強調されるムスリム女性の被害者性は、ムスリム女性の詳細な語りや実践に着目して導かれたというよりも、あくまでも他者によってなされたラベリングないし、「カテゴリー化」の帰結といえる。さらには、ムスリムは六信五行を厳格に実践するという本質主義的な視点に立脚しているからこそ、それらが十分に実践されていない状況を「抑圧の帰結」と決定づけている可能性を考慮する必要があるかもしれない。

しかし、これまでムスリム移民研究で指摘されてきたように、マイノリティとして生きるムスリムの一般信徒は必ずしも教義的に正しい信仰実践を維持し続けるわけではなく、時に非イスラーム的なものを含みこみながら生活していく。イスラームの文脈から切り離された非日常的环境の中で、食のハラールに柔軟に対応したり、ヒジャブの着用を控えたり、礼拝の回数を数回にまとめて行うなど、教義に拘束されながらも、生活に適応し柔軟にイスラーム実践を操作可能とするムスリムの姿が描かれてきた [大塚 2000; 奈良 2016; 荒木 2016]。このような「生きられた宗教」に着目する先行研究の動向を踏まえれば、家事労働に従事するムスリム女性は住み込み先の時間軸に合わせて生活設計を試みるため、必然的に実践が妨げられる局面が増えるが、必ずしも、信仰の維持/持続が困難であると単純に結論づけることはできないのではないだろうか。確かに家事労働という極めて閉鎖的な空間は問題を生み出しやすい環境ではある。しかし、主流社会から抑圧され信仰実践を十分に行えない脆弱な存在としてのムスリム女性像は、女性のエンパワーメントを研究意義の一つと捉えるケア労働者研究が生み出した「仮構」なのではないだろうか。少なくとも、今後の研究では日常における彼女たちの実践を具体的におっていく事によって、その実態を彼女たちの視点から明らかにする必要があると思われる。

他方で、注目すべきは、2010年以降のメディアテクノロジーの飛躍的な浸透である。メディアテクノロジーが人々の生活に浸透し、遠隔地で暮らす移民はメディアテクノロジーを利用して時空間の障壁を超克し、出身国との社会関係を維持/持続すると指摘されてきた [エリオット・アーリ 2016; Madianou and Miller 2012]。1990年代以降のインドネシアにおけるイスラーム復興の過程でインドネシア社会で

イスラームの存在感は増しつつあり、海外においてもインターネットや SNS などを通じて出身国であるインドネシアにおける状況を把握し、イスラームの言説を容易に知り得る時代となっている。

このような状況下、ムスリム家庭に生まれ、台湾にケア労働者として就労する女性たちが、インドネシアの文脈から完全に離れてしまうのではなく、彼女たちの信仰を維持する装置が多様に存在することが想定できる。彼女たちは職業的事情から状況に応じて信仰実践を控えるなど状況依存的な対応をとるかもしれない。しかし、自らのイスラームのあり方の問い直しを迫られインドネシアの文脈から脱埋め込み化³⁾されたとしても、小池 [2017] や澤井 [2017] が明らかにしたように、同国人との繋がりや出身国で暮らす家族・親族との関係の中で、イスラームを参照する機会はこれまでに比べて増加しているはずである。そこで本稿では、ムスリム女性たちのあくまでも日常における宗教実践に着目し、異文化の境界領域で就労するとき、様々な状況に直面しながらも、いかに信仰が維持されるのかを考察する。

1.4. 調査方法

本稿では、2019年1月～3月、2019年7月～8月、2019年9月～11月、2020年1月にかけて台湾で実施した調査をもとにしている。筆者は6名のケア労働者（A氏、B氏、C氏、D氏、E氏、F氏）、ケア労働者を雇う4名の台湾人（G氏、H氏、I氏、J氏）へのインタビューを行った。

聞き取りを行ったケア労働者の多くは中部ジャワ州、東部ジャワ州の農村部出身で、20代後半から30代前半の女性である。台北市、新北市などの都市部の雇用主宅に住み込み家事労働に従事している。調査対象者はスノウボウルサンプリングによって募った。聞き取りは、彼女たちの休日を利用し、A氏、B氏、C氏は雇用先の自宅、D氏はマンションの待合室、E氏は台北グランドモスク、台北駅構内、C氏⁴⁾はインドネシア料理店で行われた。一度目の聞き取りの後、A氏はD氏を紹介してくれ、D氏はF氏を紹介してくれた。D氏とF氏とはSNSのアカウントを交換し、相手の時間に合わせてSNSのテキストメッセージや通話機能を用いて、聞き取りを継続的に行った。

インタビューは調査対象者にあらかじめ許可を取り、状況に応じて録音され、調査後、文字起こしされた。また、参与観察などメモを取ることが状況的に許されない場合には、フィールドワーク終了後、フィールドノートに書き残し状況を整理した。なお使用言語は、英語・中国語・インドネシア語を使用し、台湾人に対しては中国語、インドネシア人に対しては中国語または英語、インドネシア語と、状況に応じて使い分けた。

表 1. インタビュー対象者の概要

氏名	出身地域	聞き取り場所	就労地域	備考
A	中部ジャワ	雇用主自宅	台北市	雇用主 G
B	東ジャワ	雇用主自宅	台北市	雇用主 H
C	中部ジャワ・チラチャップ	雇用主自宅	台北市	
D	中部ジャワ	待合室	台北市	雇用主 I
E	中部ジャワ・ケンダール	台北モスク ⁵⁾	新北市	
F	スラバヤ	夜市	新北→台北市	Dの友人

2. ケア労働者たちのイスラーム実践

現在、台湾には新南向政策の影響で、東南アジア諸国との経済投資、人的交流、観光、輸出入などの外交を強化する政策を進めており、インドネシアからは移民労働者だけではなく、留学生や専門職移民の受入を積極的に進めている。その影響で、現在台湾のイスラーム社会はインドネシア移民が最も多く、インドネシア人コミュニティによるイスラーム活動やモスク建設活動が進められている [小池 2017]。また、ムスリムの観光客誘致にも積極的に取り組み、特に一大観光地を有する台北市などの首都圏では、ムスリムフレンドリー対応として、ハラール対応のレストランや商品、礼拝室の開設が進められ、非ムスリム事業者までも巻き込み、現代台湾のハラールビジネスが展開されている [砂井 2019]。このような状況下、台湾の都市部で生活するムスリムは「台湾で生活する上での戸惑いは他地域に比べて少ない」と話すものも少なくない。しかし、台湾人の家庭に住み込みで働くケア労働者たちは、高齢者介護や関連する家事全般をこなし、まとまった休みを取る時間がなく、自らハラールな食品を求めて自由に外出したり、モスクで礼拝やイスラーム勉強会に参加する時間的な余裕も十分に確保できるわけではない。筆者がインタビューした家庭におけるケア労働者の仕事内容は各雇用主宅の方針に基づいて異なるが、一般的に家事全般をこなしている。家族成員に高齢者が含まれるため、歩行リハビリや病院をはじめとする外出時には高齢者の介助をも担う。A氏は休日にも給与をもらえるよう、毎週日曜日に休暇はもらわず、月に一度休暇を得ている。しかし、休暇日には一日寝室で寝ているなど体を休めるために休息するという。D氏も休暇は一ヶ月に一度が基本で、状況に応じて雇用主と相談し、休暇をもらう。しかし、日曜日には雇用主家族が台湾国内を旅行する際に高齢者に付き添うことを求められるなど、あくまでも休日平日の区別なく、雇用主家庭の時間軸に沿った就労が求められている。

つまり、台湾に広がるインドネシア人ムスリムたちによる諸活動からは一定の距離を取らざるを得ない状況にあると言える。彼女たちがイスラームを実践する場所はほとんど、台湾人の家庭内に限られていると言って良い。そこで、以下ではケア労働者の語りから、家庭の中で行われるイスラーム実践を食生活と礼拝実践に分けて概観する。

2.1. 食生活

ムスリムは食のハラール（食べて良いもの）とハラーム（食べてはいけないもの）があり、豚や酒などは摂取をすべきではないとされている。筆者が聞き取りを行った台湾人家庭にはムスリムの家族成員はいない。ケア労働者を雇う主な要因は高齢者介護であり、雇用主はコレステロール値の高い豚肉を使った食生活を極力避けていた。仏教徒である高齢の義母と暮らすY氏は「私の母（義母）は、菜食主義者だから、もともと豚肉などを食べない習慣」だと言う。自身はキリスト教徒であり、宗教上豚肉は禁忌ではないが、年を重ねるに連れて、自分自身の健康にも配慮し野菜中心の生活を心がけているという。このように高齢者の健康に配慮して豚肉の摂取を控えるという発言は筆者が聞き取りを行った全ての家庭で聞かれた。自身のリハビリのためにケア労働者を雇う男性も自分のコレステロール値が高いので、肉製品を用いた食事を避け、油分の少ない食生活に変えたと話す。

しかし、食のハラールは単純に「豚肉を食べない」ということだけでは達成し得ないものでもある。台北市内で料理店を営む女性は次のように話す。

うちでは、植物性の油を使っているけれどもね！でも、台湾人の家庭の中で働いている「外労」⁶⁾の子達は、植物性油かどうかは確認できないでしょう。つまりね、彼女たちは「豚」を食べているのと同じ！彼女たちはそれに気がつかないんだよ！

雇用主の中には、油にもこだわり、動物性油を避ける家庭もあるが、厳密に食材に動物性油が使用されているか否かまでも判断するのは難しい。ケア労働者の女性からは「豚肉は食べないように気遣ってくれる家庭は多いけれど、それ以外のことまで気にしていたら仕事ができないから」と話すものが多い。

ある日インドネシア料理店で、インドネシア人留学生とともに昼食を食べていた際、一人の女性 C 氏と出会った。彼女は、「あなた、日本人？ 私の雇用主 (boss) はとても日本が好きで、家では日本語の番組が見れるから、あなたたち一緒に来ない？」と声をかけてきた。友人である留学生は私がケア労働者に関心を持っているのを知っていたので、「一緒について行ってあげるから、お話を聞いてみたら？」と背中を押してくれ、彼女と私は C 氏の自宅について行くことにした。台北グランドモスクからタクシーで 20 分ほど行った彼女の「自宅」は、台北市郊外にある別荘のようなマンションであった。後から話を聞くと雇用主からあてがわれた彼女の部屋であり、そこから雇用主家族の家に行き部屋の掃除や家事などを行う。雇用主は別の自宅に暮らし週に数回様子を見にくるという。彼女は、私たちにその場で料理を作ってもてなしてくれた。調理の前に、留学生の友人はハッとした顔をして一度たじろぎ⁷⁾、「気を使わせるのは申し訳ないから、作らなくて大丈夫よ」とためらった。C 氏は「大丈夫よ。魚丸⁸⁾を使うから、豚肉は使わないよ」というが、留学生は首を縦に振ろうとはしない。それでも、最終的には C 氏が作った麺を共に食べた。C 氏はできるだけ豚肉は避けようとはしているが、いちいち気にしても何も作れないからと、豚の禁忌をほとんど気にしないようにしている様子であった。

2.2. 礼拝実践の概況

イスラームでは、1日に5回の礼拝、早朝の礼拝（ファジュル）、正午過ぎの礼拝（ズフル）、遅い午後の礼拝（アスル）、日没後の礼拝（マグリブ）、就寝前の礼拝（イシャーウ）がある。礼拝の時刻は礼拝者がいる各地域での太陽の出没条件によって規定されている。台湾の台北モスクが台湾の条件に準拠した時刻表を提供しているほか、インドネシア系のイスラーム団体がネット上、あるいはリーフレットとして台湾在住のインドネシア人に提供している。それでは、台湾人の家庭に住み込みで働き、行動が制約されがちなケア労働者たちはどのようにして宗教実践を遂行しているのだろうか。インタビュー対象者の女性たちが各家庭で行う方法は、①礼拝を定期的に行わない、②礼拝を行う、③時間をずらし雇用主にわからないように秘密裏に行う⁹⁾ 場合がある。

2.2.1. 礼拝を行わない

[事例 1] 手が洗えないから礼拝は行えない

中部ジャワ出身で、既婚かつすでに一人の子どもがいる A 氏は、夫の母に子どもの面倒を見てもらい、台湾に働きにきている。日々礼拝は行わず、ヒジャブを家庭内で着用することはない。そのため、彼女の雇用主は「彼女はよくうちに馴染んでくれるのよ。……ムスリムはヒジャブを着用し、日々礼拝を行うようだけれども、彼女はそのようなことはしないから、敬虔ではない」と言及し、「台湾人家庭によく適応してくれる、よく教育を受けたケア労働者である」と筆者に紹介した。しかし、A 氏は

その様子を見かねて、しびれを切らしたように、礼拝ができない理由を次のように話した。

「家庭での仕事は、手が汚れる。例えば、子供の世話や高齢者の介助で唾液が手につく、料理をするときなどすぐに手が離せない。礼拝をする前にすぐにウドゥができないから、礼拝はしない。」

A氏は、インドネシアで暮らしていた時には、ヒジャブを着用し、日曜には地元モスクに通い、礼拝を行うなどしていた。しかし、台湾で働く場合、仕事は朝昼晩の炊事と洗濯、高齢者である雇用主の歩行リハビリなど1日の間にまとまって休憩を取れる時間は少ない。日によって礼拝を行う時間も変動するが、仕事と礼拝の時間を調整することが難しい場合があるという。その難しさは、礼拝の前に身を清める行為である「ウドゥ」を礼拝時間に合わせて行うことができないこととも関係している。

2.2.2. 礼拝を行う場合

[事例2] 時間があるから礼拝を行うことができる

台北市内の雇用主の家で働くB氏は東ジャワ州出身で、農業を営む実家には両親と弟がおり、男兄弟が農業を手伝う一方で、台湾にケア労働者として働きにきている。彼女は、マレーシアで離れて働く男性と一度結婚したが、夫がマレーシアで浮気したため、離婚歴がある。彼女は「ムスリマには3回結婚できるチャンスがあるから、次をまた見つければ良いと思っている」と話した。

彼女の雇用主は70代の男性で妻と二人暮らしである。雇用主から、台所の横にシャワーと寝室が一体になった2畳半ほどの部屋をあてがわれ、そこで生活している。もともと雇用主は自分の母親の介護のためにケア労働者を雇っていた経験があり、自身のリハビリが必要になったことで新たにケア労働者を雇い始めたという。B氏は現在の雇用先を気に入っているという。その理由は、雇用主が自分以外にも理学療法士を週に数回雇い、直接雇用主の身体に触れる必要のある仕事はあてがわれないこと、認知症の介助など乱暴を振るわれたり汚れるようなことはないためだという。彼女はヒジャブを着用していないが、寝室の棚にヒジャブと礼拝マットをしまっており、1日の空いている時間に密かに礼拝を行う。

彼女の雇用主である男性は彼女を一人の「家族の一員」とみなしているが、プライベートには立ち入らない主義だという。「彼女がムスリムであろうと気にしない。仕事さえしっかりすれば、あとは自由にして良いし、私は彼女のプライベートには立ち入らない」という。礼拝を行う様子を見たことはなく、「ここは彼女にとって企業と同じだ。彼女が音声通話でだれかと話そうが、イスラーム音楽を聞こうが仕事を正しくこなす労働者であるならば、休息時間を自由に過ごす権利がある」と話す。

2.3. 就労条件のもとで選択されるメディアを経由したイスラーム勉強会

[事例3] 雇用主はイスラームについて知らない、だから「休憩」時間にこっそりやることができるからそれでいい

スラバヤ出身のD氏は高校卒業後に台湾でケア労働者として働き始めた。彼女の実家はスラバヤの農家出身である。高齢者介護のために住み込みで働いており、高齢者のリハビリを兼ねて外に散歩で居る時のみヒジャブを身につける。彼女は毎日礼拝を欠かさず行い、インスタグラムでイスラームに関する内容を投稿したり、インターネット上でイスラームに関する情報を調べるなどしている。

[事例4] 携帯電話でコミュニティを作って毎日礼拝をする時間を整える

中部ジャワ州のケンダール出身の E 氏は 3 年前にケア労働者として台湾にきた。日曜日に台北モスクにたまたま訪れていた時に会い、インタビューを許可してくれた女性である。彼女は、既婚で 4 歳半の息子がいる。海外でケア労働者として働くのは 19 歳からで、最初は香港で就労し、香港での就労を終えて台湾に来る前に妊娠がわかった。彼女は、雇用主と雇用主の夫、雇用主の娘夫婦、娘夫婦の子供がともに暮らす家庭に就労しており、高齢の雇用主の夫の介助や娘夫婦の子どもの世話をしている。雇用主の夫は退役軍人で 80 代だが、雇用主は 60 代と年が離れている。彼女は台湾にきてから、インドネシア人女性の友人とともに携帯電話を用いてイスラーム勉強会を行っている。毎日朝 4 時と大方の仕事を終えた夜 9 時に始まり、出会ったインドネシア人女性たちとコーランの勉強会を続けて行なっている¹⁰⁾。参加者たちは 30 名ほどであり、台北駅に集った際に知り合った女性から電話でイスラーム勉強会を行っているから参加しないかと誘われて参加することにしたという。彼女はイスラーム勉強会を行う理由を次のように語る。

「台湾にいても、イスラームにおいて何が悪いことか、何が良くないことかを学び続けることは重要よ。それに私の雇用主は礼拝を行う時間のことを「休憩」のように捉えていて、私が自宅にいてくれさえすれば、自由に休憩をしていいというから、礼拝もできるし、携帯電話で勉強会を行うことができる。」

[事例 5] スマートフォンで礼拝に参加する

手を洗うことができないから礼拝を行わないと話す A はイスラームの文脈から完全に切り離されてはいない。インドネシアで離れて暮らす夫と子どもがイスラーム勉強会に参加する際に、SNS の音声通話機能を使って連絡を取り、その動画を閲覧し、イスラームの礼拝を聞いているという。彼女の雇用主は「部屋にいながらにして外の様子がわかるのならば、外に出る必要はない。携帯電話は SNS を通じて外出せずとも人とのネットワークが構築できて都合が良い」と話す。

このように携帯電話やスマートフォンを用いてイスラーム実践に参加する女性たちは多い。ケア労働者の携帯電話の使用について雇用主は次のように話す。G 氏は 30 代後半で台北市内に親と祖母と同居して暮らしている。現在のケア労働者を家庭に雇い入れてから 5 年がたつが、現在は彼女の祖母の介護を名目として雇っている。

「台湾人は、自分が仕事がしたい、だから外国からきた子たちにつまらない仕事をやらせていて、後ろめたさや罪悪感みたいなものがある。だから、自由にしてリラックスしてもらいたって思っで、電話くらいならいいと思って許す人もいる。介護の仕事はすごくストレスがたまる。インドネシア語で喋っている内容も、ほとんどが愚痴なのかもしれないけれど、でも。」

冒頭で述べたように、高齢化によるケア需要の高まりはケア労働者と雇用主との関係を変えつつある。

2.4. 集団性を伴うイスラーム実践に対して働く自己規制

筆者が聞き取りを行ったインフォーマントの女性たちは、2. の冒頭で述べたような特定のエスニッ

ク・コミュニティに対する帰属意識を強くは持たず、関わりを持っているわけではない。Eもモスクを訪れる際には基本的に一人であるという。彼女たちは全員、SNS上で拡散されるラマダン明けのイベントや犠牲祭が台湾各地で行われていることを知っている。しかし、それについて「男女がともに参加し、風紀が良くないから参加したいとは思わない」という。A氏は既婚で子どもがおり、「そこに参加して集う男女は20代前半の若いムスリムで、交際や結婚の相手を探しにイスラームを名目にして集まっているだけで、純粹にイスラームなものではない」という。他方、イスラームイベントが多く開催される台北駅周辺で友人からの紹介で結婚に至った女性もいる。D氏は台湾北部の桃園市内でケア労働者として働いていた際、すでに20代後半に差し掛かり結婚に焦りを感じていた。台北駅で知り合いその後も連絡を取り合っているF氏から、台湾で働く現在の夫を紹介され、交際期間が長くないように3ヶ月で結婚を決めたという。結婚したその後は、不特定多数の男性が集う場所には赴きたくないという。携帯電話でイスラーム勉強会を行うE氏も男性が集まる場所には赴きたくはないので、インドネシア系のムッサラ¹¹⁾には行かずに、女性同士で携帯電話で勉強会を行うという。

他方、D氏は筆者がイスラーム団体が台北駅まで開催するイベントに参加したことがあるかを訪ねた際に、自らのヒジャブの端を持って口や鼻を覆い、次のように答えた。

「私はただ、祈っているだけの一般的なムスリムなのよ。(口や鼻までヒジャブで覆い隠して) テレビでよく見る中東などの厳格なムスリムとは違う。それに、大学生みたいに、学歴が高くないから、そういうイスラームのイベントに積極的に参加したり、勉強会をしたりはしないの。」

彼女は、自分が市井のムスリムであり、日常の参照軸としてのみイスラームを実践する人間であること強調した。イスラームを厳格に学んだり、原理主義的なイスラーム運動とは関わりを一切持っていないことをヒジャブによって顔を覆う仕草によって現したとも言える。しかし、D氏は後日、自らが礼拝時間を把握するために日々用いている、イスラーム団体から受け取った礼拝の時刻表のリーフレットを筆者に見せてくれた。

3. 分析：柔軟に操作されるイスラーム、社会関係に埋め込まれたイスラーム

筆者がインタビューを行った女性のうち、D氏をのぞいて、雇用主宅で働くときにはヒジャブをつけない、礼拝は雇用主の目につかないところで行うようにするなど、雇用主との摩擦を目立たせないように行動している。雇用主との軋轢を避けながらイスラーム実践を維持する方法は、イスラーム実践を一見して顕在化させないメディアデバイスを用いることであった。

大塚 [2000] によれば、海外移住者のように必ずしもイスラームが自明ではない状況下でイスラームが問い直しの対象となる場合、ムスリムは実践を柔軟に操作可能とみなすようになる側面もある一方で、あくまでもその行為はコーランの教義に拘束されながら遂行される [大塚 2000]。彼女たちは外国人家庭で就労するという境界領域において特殊な環境を生き、イスラームによる教義を参照しながら、非日常的環境の中で、礼拝を行わない、あるいは完全にハラールとは判断しがたい食生活を許容するなど、柔軟に対処している。他方で、男性が多く集まる場には足を運ぼうとしない、イスラームに習って¹²⁾結婚に至るまでの時期は短くすべきだという発言から分かるように、彼女たちの行為は完全にイスラームの文脈から外れているわけではない。「ウドゥができないから礼拝を行わない」という発言が

らもわかるように、教義を参照して、行動の適切さを判断しながら、イスラーム実践を柔軟に「操作可能」なものとしてみなすというせめぎ合いの中を生きていると考えられる。他方で、このような彼女たちの実践は教義に拘束されながらも、現実における仕事をこなすために雇用主との関係の下で、可変的である。例えば、2-5. で記述した男女が集まるイベントへの参加を控えることや自らを市井のムスリムであり「ただ祈っているだけである」と述べる態度からは、ムスリムに対する否定的イメージと自らとの差別化を企図する様子が読み取れる。これは、家庭での就労を優先するためのイスラーム実践に対する自己規制と言える。

しかし、彼女たちは数年で本国に帰国し、家庭の一員として、また母親としての生活に戻ることを望んでいる人々であった。彼女たちは海外における就労でイスラームの客体化を経験する一方、自らを再びイスラームの文脈に埋め込む実践を、メディアを通して行うことによって、その可変性を調整しながら生きていけると言える。マディアノウとミラーは、メディアが、遠隔地で暮らすケア労働者とその家族・親族との親密圏を再構成することを指摘した [Madianou and Miller 2012]。また、メディアを用いた実践の中でも、携帯電話やスマートフォンなどの個人で携帯可能な「小型化されたモビリティーズ [エリオット・アーリ 2016]」はケア労働者による家族との親密圏の構築だけでなく、友人とのつながりの維持、ケア労働者と雇用主との関係を調停すると指摘されてきた [藍 2008 : 237-243; 上野 2011]。

さらに、携帯電話を獲得することが出身国での自己との差異化をはかり、海外で働く自己を積極的に受け入れるようアイデンティティを強化するとも指摘されている [上野 2011: 143-147]。他方で、本研究が示すように、彼女たちがデジタル技術を通じて行う実践は家内空間における雇用主との関係の組み替えや、家族や友人とのネットワーク形成を通じた親密性をめぐる交渉のみではなく、イスラームの礼拝や説教をも含みこむことが分かる。家族と毎週礼拝を聞く A 氏の事例や携帯電話で勉強会を行う E 氏の事例からは、彼女たちのイスラーム実践が友人や家族との親密圏を構成する過程に埋め込まれていることがみてとれるのである。

4. 結論

本稿では台湾の高齢者介護を事例として、住み込みで介護をはじめとする家事全般を担うケア労働者たちの語りから、異文化境界領域における宗教実践の実態を理解することを試みた。先行研究におけるケア労働者のイスラーム実践は、雇用主との二項対立的な関係図式のもとで捉えられてきた。そのため、雇用主の無理解や文化的差異を背景に実践が部分的に制約を受けることが指摘された [Constable 2007; 上野 2011; 劉 2012]。しかし、本稿が示すように、ケア労働者のイスラーム実践は教義による拘束性を伴いつつも、就労との折り合いをつけながら柔軟に選択された帰結である可能性が指摘できる。さらに、本稿が事例とする女性たちのイスラーム的な実践は、特定のエスニック・コミュニティへの帰属を通して行われるのではなく、家族・親族との繋がりや、友人との繋がりなど、個人を基軸として広がるミクロな繋がりに基づいている。このように、個人の状況に応じて選択され、特定の帰属意識を標榜しない緩やかに形成される繋がりにアクセスすることで自らの実践を調整する一方、特定の集団的行動を顕在化させないように自己規制をかけている。すなわち、可変的かつ可塑性を伴う宗教実践という従来研究におけるケア労働者のイスラーム実践に対する理解は、彼女たちが就労を有利にするための「演出」に近く、必ずしも、イスラームの文脈から切り離された帰結を意味しない。むしろ、彼女たちは雇用主から使用を許されたスマートフォンを用いて、家内空間にいながらにして、イスラーム実践が持続

可能な空間を構築し、その空間内で教義上の矛盾をはらみながらも部分的にイスラームを遂行可能としているのである。

注

- 1) Akinci氏は、2019年に少なくとも2本の論文を発表しているようだ。ただし、本論と関係するとみられるのは、*Ethnic and Racial Studies*, 42巻3号所収の、Ahmad, Attiya 2019 *Everyday Conversions: Islam, Domestic Work, and South Asian Migrant Women in Kuwait*. の書評と思われる。
<https://www.tandfonline.com/doi/full/10.1080/01419870.2018.1501506?scroll=top&needAccess=true>
 この点は、横田祥子先生のご教示による。
- 2) 「受けられないためである」が何を受けているかがわかりにくい、「ムスリム女性が直面する問題は等閑視されている」のはなぜかについて説明していると思われる。「家庭内で礼拝が許されない場合もある。しかし、香港人ムスリムが集うモスクにはケア労働者は参加せず、ハラールな食材やモスクでの礼拝にアクセスする機会が限られ、外部からの十分な支援が受けられないため、ケア労働者が直面する問題は不可視化されているのである。」ということではないだろうか。
- 3) インドネシア的な文脈の中では当たり前だった（生活に埋め込まれていた）イスラームのありかたが、海外でケア労働者として働かねばならなくなったため、そのような環境から切り離された、というようなこととして「脱埋め込み化」を用いているのだろうか。
- 4) F氏ではないかと思われる。
- 5) 本文7ページ10行目によれば、「台北グランドモスク、台北駅構内」とある。なお、「台北モスク」と「台北グランドモスク」とは同一である可能性は高いと思われるが、原著者の表記のママとしている。
- 6) 外国人労働者のこと。
- 7) はっとしてたじろいだのがいかなる理由であったかは明記されていない。筆者がムスリムではないので、C氏に食事を作らせるのは申し訳ないと気が付いた、ということであろうか。
- 8) 魚のすり身団子。
- 9) 「インターネットを通して、時間をずらし雇用主にわからないように秘密裏に行う」とすべきだろう。②との違いは、ITを使用するかしないかである。
- 10) 元の文章は「毎日夜9時に始まり、出会ったインドネシア人女性たちとコーランの勉強会を続けて行っている。毎日朝4時、大方の仕事を終えた夜9時に始める。」である。
- 11) 礼拝や祈祷の場。
- 12) 「イスラームの慣習に倣って」であろうか。

引用文献

(和文・中文)

- 安里和晃 2014 「グローバルなケアの供給体制と家族」『社会学評論』64(4): 625-648.
- 荒木亮 2016 「異国で信仰が問われるときー再帰的近代化,あるいはイスラームのオブジェクト化に纏わる一試論ー」『人文学報(社会人類学分野9)』512(2): 123-138.
- 上野加代子 2009 「抵抗のストラテジーーシンガポールの家庭で就労する外国人ケア労働者ー」『立命館言語文化研究』20(4): 19-38.
- 2011 『国境を越えるアジアのケア労働者 女性たちの生活戦略』世界思想社.
- エリオット A.・J. アーリ著, 遠藤英樹訳 2010 (2016) 『モバイル・ライブズ 「移動」が社会を変える』ミネルヴァ書房.
- 大塚和夫 2000 『イスラーム的 世界的時代の中で』講談社学術文庫.
- 小池誠 2017 「異郷に「ホーム」を作るー台湾におけるインドネシア人ムスリムの活動」『桃山学院大学総合研究所紀要』43(1): 213-235.
- 佐藤誠 2012 「第一章 ケア労働と国際移民の理論的考察」佐藤誠(編)『越境するケア労働』pp.1-18, 日本経済評論社.

- 砂井紫里 2019 「台湾ムスリムの食文化をめぐる交渉と創造—清真, ハラル, ムスリム・フレンドリー」『文化人類学』83(4): 593-612.
- 澤井志保 2017 「香港で働くインドネシア人ケア労働者のイスラーム文学創作グループに見られるインターセクショナルリティ」『インドネシア言語と文化』23: 83-100.
- 奈良雅史 2016 『現代中国のイスラーム運動 生きにくさを生きる回族の民族誌』風響社.
- 細田尚美・渡邊 暁子 2013 「湾岸アラブ諸国におけるフィリピン人労働者の改宗と社会関係の持続と変化—ボーン・アゲイン・クリスチャンとイスラーム改宗者の事例から」『白山人類学』16: 29-53.
- 藍佩嘉 2008 『跨國灰姑娘 當東南亞幫傭遇上臺灣新富家庭』行人文化實驗室.
- 劉淑青 2012 『被忽略的過客—在台印尼伊斯蘭教家庭看護工宗教踐行的困境與應對』國立暨南國際大學社會政策與社會工作學系碩士論文.

(英文)

- Akinci, I. 2019 Everyday Conversations: Islam, Domestic Work, and South Asian Migrant Women in Kuwait, by Attiya Ahmad, *Ethnic and Racial Studies*, 42(3): 453-455.
- Anggraeni, D. 2006 *Dreamseekers: Indonesian Women as Domestic Workers in Asia*. Equinox Publishing Indonesia.
- Constable, N. 2007 *Maid to Order in Hong Kong: Stories of Migrant Workers* (2nd ed.). Ithaca: Cornell.
- 2010 Telling Tales of Migrant Workers in Hong Kong: Transformations of Faith, Life Scripts, and Activism. *The Asia Pacific Journal of Anthropology*, 11(3-4): 311-329.
- Cruz, G. T. 2006 Faith on the Edge: Religion and Women in the Context of Migration. *Feminist Theology*, 15(1): 9-25.
- Cruz-Chia, G. 2007 Filipina Domestic Workers in Hong Kong', in F. Wijzen & R. Schreiter eds., *Global Christianity: Contested Claims*, Rodopi, Amsterdam, pp.199-217.
- Hawwa, S. 2000 From Cross to Crescent: Religious Conversion of Filipina Domestic Helpers in Hong Kong. *Islam and Christian-Muslim Relations*, 11(3): 347-367.
- Ho, Wai-Yip 2015 The Emerging Visibility of Islam through the Powerless: Indonesian Muslim Domestic Helpers in Hong Kong. *Asian Anthropology* 14(1): 79-90.
- Hsia, Hiao-Chuan 2009 The Making of a Transnational Grassroots Migrant Movement: A Case Study of Hong Kong's Asian Migrants' Coordinating Body. *Critical Asian Studies* 41(1): 113-141.
- Johnson, M. and Werbner, P. 2010 Diasporic Encounters, Sacred Journeys: Ritual, Normativity and the Religious Imagination Among International Asian Women. *The Asia Pacific Journal of Anthropology* 11(3-4): 205-218.
- 2011 Introduction, *Diasporic Journeys, Ritual, and Normativity among Asian Migrant Women*. Routledge.
- Liang, Li-fang 2011 The Making of an 'Ideal' Live-in Migrant Care Worker: Recruiting, Training, Matching and Disciplining. *Ethnic and Racial Studies* 34(11): 1815-1834.
- Loveband, A. 2004 Positioning the Product: Indonesian Migrant Women Workers in Taiwan. *Journal of Contemporary Asia*. 34(3) : 336-348.
- Madianou, M. and Miller, D. 2012 *Migration and New Media: Transnational Families and Polymedia*. Routledge.
- Parreñas, R. 2015 *Servants of Globalization: Migration and Domestic Work*, second edition, Stanford University Press.
- Yap, Valerie C. 2015 The Religiosity of Filipina Domestic Workers in Hong Kong. *Asian Anthropology*, 14(1): 91-102.